

白衣のポケットの中

医師のプロフェッショナリズムを考える

宮崎 仁, 尾藤誠司, 大生定義 (編)

本書は「医師のプロフェッショナリズムを考える」として、医師という職業（プロフェッション）のあり方を問いかけながら、プロフェッショナリズムは日常診療のなかにあることを気づかせる。なぜ自分は医師を続けているのかという自らの問いに答える形で、「医師というプロフェッション」とは何かを明らかにする。それは実証的ともいえる探求に基づいた実に印象深い実践の書となっている。編者の一人尾藤氏は「教条的なことを書いた本ではない」「国民は、立派な教条ではなく、医療専門職の意識と行動の変化を求めているのだ」という。

本書を手にしたとき、正直言って、『白衣のポケットの中』という表題に、“それって何なの？”と思ったのも事実である。医学概論の論者であり医学教育者でもあった中川米造さんとのかつての白衣論議で、必ずしも白衣に対してはよい思い出がないからでもある。その中川さんは、「古典的にはプロフェッションとよばれる職業は、医師と法律家と聖職者の三つだけであったが、いずれも中身がわからない職業であるうえに、質の悪いサービスを受けると重大な結果を招くおそれのあるものである」といつている。とかくプロフェッショナリズムという言葉からは、ヒポクラテスにまでさかのぼる医療倫理という堅苦しさをイメージさせたからでもある。

だがそのような読み物となっていないところに本書の特徴がある。読者をして、日常診療の場で身近に起こり得る現実の問題に直面させながら問題解決をしていくプロセスのなかで、プロフェッショナリズムを考えさせていくという巧みな執筆手法（むしろ編集といったほうがよいのかもしれない）がとられている。決して

難しくもなく、そんなに易しくもなくプロフェッショナリズムが論じられている。

本書の構成において、Part 1 は大生氏の概論に始まり、永山氏による新ミレニアムが紹介され、いわば総論部分である。Part 2 は宮崎氏がタイトルしたそのままの、白衣のポケットの中からあふれだした医師たちの「物語り」である。それは今日的に医療の現場で起こっている事例をあえて想定問題として提起し、問題解決型で考えていく記述となっている。必ずしも医師でなくとも専門職である読者に対して、プロフェッションとしてどう解決するかを問うパートである。目の前にいる患者さんの問題解決のためのヒントが与えられる。

そして Part 3 は現代医療が抱えているすべての問題に果敢に立ち向かう医師の姿を追い求めて、解決への示唆に富んだ問題がプロフェッショナリズムとの関係性において十分な文献をも紹介しつつ学術的にも究めた論述となっている。最終のコラムは、中途に組まれた尾藤氏、錦織氏のものを含め現状の日本の医療のなかにおけるプロフェッショナリズムが論じられていて興味深い。

すべての医師をはじめ、ことに臨床研修医の皆さん、そして医師以外の医療職の方々、できれば一般の人たちにも必読の書としてお勧めしたい本である。

NPO 法人卒後臨床研修評価機構 岩崎 榮

●A5 頁 264 2009 年

定価 2,520 円（本体 2,400 円＋税 5%）

[ISBN978-4-260-00807-5] 医学書院刊